**２０２３年７月29日(土)　　　海應院会場**

藺草慶子

新しき街の直角夏旺ん 柳沢美恵子

風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

〇 軒深き木曽の駅舎や秋近し 中村幸子

片陰を譲り合ひ行く坂の町 木村さとみ

この時間片蔭もなく人もなく 天野明雀

伊藤修文

片蔭の途切れて人も途切れけり 吉沢道夫

片陰を譲り合ひ行く坂の町 木村さとみ

片蔭に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

石垣の隙間に小石蟬しぐれ 藺草慶子

〇 信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

吉沢道夫

〇 空蟬を抱く空蟬や愛無限 木村さとみ

片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

七節のゆつくり行けとかんかん帽 島木　翠

めまとひやここより野山よそよそし 島木　翠

父母の墓誌なぞればつんと赤蜻蛉 木村さとみ

柳沢美恵子

炎天に寺院の松の鱗かな 北原みゆき

裸の子ナ行ヤ行のもどかしく 中村幸子

〇 信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

信濃路の片かげなべて登り坂 伊藤修文

夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

木山靖史

かき氷嘘でそまった赤き舌 伊藤修文

〇 片蔭にしばし休らふ旅鞄 吉沢道夫

風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

終末時計ねぢ巻く如き蟬の声 藺草慶子

末期なら水とりあへず生ビール 伊藤修文

中村幸子

〇 風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

信濃路の片かげなべて登り坂 伊藤修文

木漏日とも氷室を漏るる冷気とも 梅田実代

をちこちに裏白そよぐ氷室かな 梅田実代

父母の墓誌なぞればつんと赤蜻蛉 木村さとみ

天野明雀

〇 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

峰雲のさらに高きへちぎれ雲 藺草慶子

炎天に寺院の松の鱗かな 北原みゆき

片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

かき氷嘘でそまった赤き舌 伊藤修文

島木　翠

〇 片蔭に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

その睫毛見たし蚊を待つ広座敷 前田恵美

をちこちに裏白そよぐ氷室かな 梅田実代

蜘蛛の囲や的のごときの大輪に 北原みゆき

緑蔭に寝転ぶ牛は喰ひ疲れ 伊藤修文

前田恵美

〇 新しき街の直角夏旺ん 柳沢美恵子

木陰得て目高元気や虚子のかな 柳沢美恵子

ツーアウト満塁きゆうり齧りつつ 梅田実代

炎昼の松は四百年を生く 木村さとみ

峰雲のさらに高きへちぎれ雲 藺草慶子

梅田実代

風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

風穴やのびらかな声老鶯に 島木　翠

信号を待つに形陰やや遠し 藺草慶子

めまとひやここより野山よそよそし 島木　翠

〇 虚子の字と眼鏡と丸し冷し瓜 前田恵美

北原みゆき

風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

片陰に知るこの町のかたちかな 藺草慶子

〇 夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

溽暑にも松の枝振り揺るぎ無く 天野明雀

片蔭にしばし休らふ旅鞄 吉沢道夫

木村さとみ

風穴の扉をなめて夏の霧 前田恵美

末期なら水とりあへず生ビール 伊藤修文

夏雲は大志のごとし虚子旧居 吉沢道夫

高原のホテルのランチ匙涼し 北原みゆき

〇 緑蔭に寝転ぶ牛は喰ひ疲れ 伊藤修文